

科学研究費成果報告書「近現代日本の政策史料収集と情報公開調査を踏まえた政策史研究の再構築」(基盤研究(B)(1)、代表者伊藤隆平成15・16年度、代表者伊藤隆、課題番号:15330024)より

2. 加藤 聖文氏

かとう・きよふみ 人間文化研究機構国文学研究資料館助手

日時: 2003年9月30日

出席者: 伊藤隆 セルゲレン 高橋初恵 伊藤光一 高山京子 奥健太郎 武田知己
梶田明宏 駄場裕司 鹿島晶子 茶園義男 神田豊隆 所澤潤 季武嘉也
中見立夫 黒澤良 服部龍二 小宮京 濱田英毅 佐藤純子 東中野多聞
佐道明広 村井哲也 清水唯一朗 矢野信幸

伊藤 それでは始めたいと思います。きょうは、国文学研究資料館とありますが、変わられませんでした?

加藤 そうです。なかにある史料館です。国立史料館です。

伊藤 国立史料館の加藤さんにお話をいただくということでもあります。表題は前にお知らせしましたように、「韓国・台湾・旧満洲に残された史料をめぐる現状と課題」というお話ですが、加藤さんは『近現代日本人物史料情報辞典』にもたくさん書いてくださいますので、国内の史料についてもお詳しいんじゃないかと思しますので、時間があれば、そういうお話もしていただきたいと思います。時間は無制限ですので、よろしく願いいたします。

加藤 いま、ご紹介に与かりました国文学研究資料館史料館の加藤と申します。ある世代の方から下の人にとっては聞き慣れない名称ですが、通称でいうと国立史料館といわれています。この話はまたあとでたぶん出ると思いますが、来年の独立法人化の問題のなかで名称も変わってきますので、今年度いっぱいがこういう肩書ということになります。私のほうに、史料の話をしていただきたいということであったものですから、自分としましては、もともとは満蒙政策ということをやっていた関係上、旧満洲などで史料の調査をしておりました。そうこうするうちに、檜山先生に誘われまして、台湾総督府の文書の整理を始めたりしている間に、どんどんと植民地ものばかりになってしまったというのが現状です。きょうは、あとで私の所属しております史料館の話も若干申したいと思いますが、その前に各植民地にありました史料について、少しお話をしたいと思います。

ここの研究会では、きょう、いらっしゃっている中見先生とか、さきほどちょっと触れました檜山先生とか、佐賀大の永島先生などが満洲や朝鮮・台湾の話もされておまして、そういった部分とちょっと被るんですけども、ただ、こういう地域は年々情報が新しくなって、状況は常に変わっております。ですから、昨年の情報というもの、今年になってそのままかというところではなくて、かなり変わっていると。そのために、常に新しい情報というのが必要ではないか

などと思います。特に、台湾と韓国では、この数年間で史料状況というのがずいぶんと変わりました。90年代に、史料公開という形で進んでいったんですが、それがより制度的に確立されていくのがこの数年であります。そういったことも含めまして、より正確な情報をお知らせするということがいいことではないかと思ひまして、あえてそういう話もさせていただきます。樺太は計画してなかなか行けないんですが、一応自分が行っていますのが台湾や朝鮮、あとは旧満洲、そういったところをフィールドで調査をしているんですが、朝鮮総督府と台湾総督府の文書について、まず、お話をしたいと思ひます。

ご承知のように、朝鮮総督府は、政府記録保存所といういわゆる日本の国立公文書館みたいな機関があります。そこに朝鮮総督府文書があります。これは大田広域市というところで、政府機能を移転するというので、もともとはソウルにあった政府機関が大田に何件か移転しております。そのなかの一つで、政府記録保存所も大田のほうにいま移っているわけです。そのほか、釜山に支所がありまして、ソウルのもともとあった政府記録保存所のところはいま出張所という形になっております。この原本ですが、朝鮮戦争中にもともと朝鮮総督府の文書庫にあった史料が釜山に疎開されまして、そのまま戦後は釜山の政府記録保存所の支所にずっと保管されていたわけです。ほとんどの日本人側の研究者はこのまま釜山にいまでもあると思ひていらっしゃる方が大半ですが、実際は、この原本はいま大田のほうに移されております。大田の政府記録保存所の建物の地下に書庫がありまして、そこにいま納められております。これはざっと分量的にいうと、総督府の文書庫にあったものと、それから、その後に現用文書として韓国政府に引き継がれていた文書があります。それと、府レベルの文書がありました。それは各地方庁が引き継いでいたんですが、そういったものを全部集めると、だいたい24,000巻ぐらいになります。これらはすべてマイクロフィルムで撮影されまして、いま大田の政府記録保存所に行けば、マイクロフィルムで見せてもらえます。ちなみに、マイクロフィルムは釜山の支所、ソウルの出張所にもありますので、マイクロフィルムだけでしたら、ソウルでも十分で、わざわざ大田に行かなくても、ソウルで閲覧することができると思ひます。これは組織的な問題ですが、釜山は支所という形になっていますので、釜山で見る場合は面倒臭いんですが、ソウルの場合は、出張所ですので、閲覧申請をして、許可が下りるのはスムーズになっています。ですから、普通見られる方はソウルに行ってマイクロフィルムを見るというのがいちばん簡単だと思ひます。これは数年前まではマイクロフィルムを見るのも大変だったとか、ソウルにまだ政府記録保存所があった時代は、確かにコピーをするのも判子を押してチェックを受けるとか、その前にまず日本の大使館へ行って証明書みたいなものをもらって、それから、閲覧して、コピーは一点一点全部チェックされるというぐらいに非常に大変だったんですが、いまは完全にオープンです。マイクロフィルムも自由に見られますし、プリントアウトも自由にできます。

ただ、問題になっているのは、ここは1960年代に一度政府記録保存所の文書目録という形で、総督府文書の目録が刊行されたんですが、これがいまも一応見られるんですが、検索手段としては体を成していない。なぜかと言いますと、この目録をつくった時点でマイクロフィルムはすでに撮影されていたんですが、目録ができたあとに、最初に撮影したのがあまりよくなかったので、

写し直したんです。写し直した時に、どういう訳か、文書をちょっといじりました。そのために検索というか、史料番号がずれてしまった。ずれてしまって、そのままいまの番号になっていますので、目録に載っている番号だと、いまの史料番号とは合致しないという形で、目録を見ると、何があるのかはわかるけれども、そこにはいきあたらないという厄介なことになっています。また、いまは政府記録保存所のほうは目録をつくるという考えはありませんで、基本的には全部コンピューター検索です。コンピューターで、閲覧室に行って、キーワードでも何か打つと、それに合致するような文書がバツと出てきます。ただ、問題なのは、もとは日本語の史料ですが、全部向こうのハングルに翻訳されてしまっていますから、それがわからないと検索できない。だから、ハングルを知らないと、向こうでは検索できないという難点があります。しかし、研究員のなかに何人か日本語のできる方がいらっしやるので、そういう方にちょっとお願いするとか、そういう形で話していただければなんとかなるかなと思います。

記録保存所のほうでは、コンピューターにもう入力してますので、コンピューター検索で対応できるということで、目録をいまから作ろうというふうには組織としては考えていません。個々の研究員のなかでは、もう一度ちゃんとした目録を作りたいという方もいらっしやるんですが、まだそこまでの段階には至っていません。その代わり、これはどうしてやり始めたかはわかりませんが、毎年一冊ずつ解題集というものを発行することになっております。いま、3冊出ています。最初に、警務篇があったんですが、見本として、きょう、持っているのは外事篇です。外事課が持っていた史料です。それも、いちいち簿冊一冊ごとに解題を。

伊藤 それもハングルですか。

加藤 全部ハングルです（笑）。写真のこれ自体は日本語ですから、これはわかるんですが、それ以外は中身は全部ハングルですから、ハングルを読めないと全然わかりません。これはいろんな人を動員して作っているらしくて、一冊ごとに丁寧にいちいち解題をつくっているという根気のいるようなことを始めてしまいまして、それを毎年一冊出しているところです。こういうもので一応こと足りるといふか、こういう形で話は進められているということです。

伊藤 その前にお話がありました『政府記録保存所文書目録』もハングルですか。

加藤 いや、この当時はまだ漢字の部分は漢字で、たとえば「何々に関する件」というと、「にする」というところはハングルです。ですから、ほとんど意味はわかります。あの当時は、公文書もかなり漢字が多かったのでわかるんですが、いまはオールハングルになっていますから、ハングルがわからないと、わからないことになっています。ちなみに、総括目録と索引目録の計10冊の文書目録ですが、これは印刷された部数自体も非常に少なく、韓国でもあまり流布されているものではありません。政府記録保存所に行けば確かにありますが、それ以外には、大学レベルでいうと、高麗大学に目録がある以外には、ソウル大学は確かなかったと思います。ただ、これは見ているとおもしろいツールということで、日本でも、実は一ヶ所ありまして、そこでだいたい朝鮮史の人たちとかは目録を見て、おおよその見当をつけて行くということを昔からやっています。そういった形で、いまはずいぶんと状況が変わってきています。だから、全然見られないということでもなくて、一応見せてくれますし、極めてオープンな形になっています。

あとでちょっと触れますが、金大中政権になってから、記録物管理法というのが1999年にできます。その時に、各行政機関が記録保存所のようなものをつくって、さらにアーキビストを置くということを義務づけておりました、政府記録保存所でも、そういった教育を受けた第一期生が現場で働いております。ですから、彼らは非常に意欲も高いですし、文書の公開とか、整理について非常に熱意のある人が多くて、話は非常にしやすくなりました。彼らのなかで、いま、朝鮮総督府文書をもう一回研究的に位置づけていこうという動きがありまして、今年、日本の財団のほうに申請して、もうすぐ結果がわかるということなので、それが通っていれば、来年からまたずいぶんと話が大きくなっていくのではないかと思います。

朝鮮総督府文書は、以上のように、政府記録保存所のほうに大半は保管されているんですが、それ以外に、国史編纂委員会にもその一部が所蔵されております。京城にあった地方法院検察局の文書とか、警察関連、統監府関係の文書の一部等々が国史編纂委員会のほうに流れております。こちらもいまは全部向こうでコンピューターで検索できますので、どういったものがあるかというのはすぐ行き当たりますし、割と便利にはなっています。

そのほか、これは朝鮮史研究者のなかでもよく言われているんですが、1924年から26年分の一部、ちょうど京城帝国大学に関わる部分だという話ですが、朝鮮総督府文書が戦前に京城帝大に貸し出しされたまま敗戦を迎えて、そのまま京城帝大の後身のソウル大学に所蔵されていると言われております。ただ、これは現地の人にも確認してもらったんですが、ソウル大の人にもわからないと。あるらしいんだけど、どこにあるのかはわからないということで、いまはその実態はわからないということになっています。ソウル大学の奎章閣のなかに一部統監府関係の史料などが混ざってはいますが、そちらも行けば、目録のほうで見られると思います。だいたい韓国においてはそんな感じです。

それと対になるという形で、台湾総督府の文書が、昔は台湾省文献委員会といわれていたところ、いまは国史館台湾文献館という名称に変わっているところに所蔵されています。これは前に檜山先生がこちらでもお話ししたので、あまり被ってもしようがないから、ざっと話して終わりますが、だいたい原本が13,000冊です。朝鮮のほうが10,000巻多いんですが、これも全部マイクロフィルム化とCD-ROM化されております。CD-ROMもすべて撮り終わって、全部それで公開という形になっています。マイクロフィルムの場合は、ずいぶん昔にずさんに撮影が行われたものですから、あまりいいものではないんですが、CD-ROMのほうは直接スキャンしたもので、割と鮮明に出るものとなっています。ですから、閲覧室に行って、コンピューターの画面で見るということです。実はこのCD-ROM化された総督府文書は、当時の台湾省文献委員会と中央研究院の近代史研究所の二つがジョイントしてこの作業をやったんですが、お金は中央研究院のほうが出しています。ですから、中央研究院の近代史研のほうで、もう一セットCD-ROMで持っています。それをホームページで公開するという話が進みまして、台湾だけではなくて、海外からでもそこにアクセスすれば、総督府文書すべてが見られるという触れ込みで始めたんですが、今年の3月の終わりにはそういう話になるんだという話はしていたんですが、そう言っている間に、結局、あまり公に言うのはあれかもしれませんが、要はお金が

欲しいということもあってトラブルになって頓挫してしまいました。ホームページは立ち上がりまして、近代史研究所のホームページのなかに総督府文書の公開するためのあれはできて、しかも、そのなかに目録は全部入っているんです。ですから、文書自体が何があるかというのはすべてわかるようにシステムができています。これは文献館に行くとわかるんですが、閲覧室に備付けの目録というのは、公文類纂という形でまとめられたものしかないんです。それ以外に1年保存や5年保存、あとは未編綴の史料というのがあって、それは目録化されていなくて、わからなくなっています。一冊だけCD-ROMで撮影した時の目録があって、それには載っているんですが、あまりそれに気づく人がいないものですから、ほとんどはわからないシステムになっています。そういったものを含めて、全部すべての文書は何があるかというのをそのホームページで一時期公開していましたが、春までは見られたんですが、最近になってみたら、どこにもなくなっていました。台湾ではたまにあるんですが、たぶんまた無期延期になってしまったのかなと。しばらくは見られないんじゃないかと思います。本当はそれが見られると、日本でかなり簡単にアクセスして、どういうものがあるかというのをチェックしながら、現地で見られるということができたんですが、こうなってくると、向こうに行つて、現地で見なくてはいけなくなるということでもあります。

檜山先生がここで話したように、中京大学が昔から目録をつくってしまっていて、いまも刊行中です。いま漸く明治期が終わって、大正期に差し掛かっているところですが、ただ、これだといつまでになるかなという気の長い話です。国史館台湾文献館というのは、そういうように、台湾総督府文書を保管しているところなんです。それ以外にも話しますが、台湾総督府の文書でも本府の文書です。それ以前に、明治期に地方庁の改廃によって、行政整理のなかで移管された文書はありますが、基本的には地方庁は持っていません。州や市のレベルというのは、台湾の各地によって、所蔵機関が異なってきました。実はいま、このレベルの文書というのは、いちばんどこにあるのかというのがわからない。台北と台南の州の地方庁の文書は国史館の本館のほうにあるとか、そういうふうに使われていますが、はっきりしたことはわかりません。

文献館のほうでは、台湾総督府の本府の史料以外に、台湾拓殖の文書があります。台湾拓殖株式会社の文書としては、かなりまとまったものでありまして、これはCD-ROM化もされていますが、それを焼き付けて、紙焼きしたものが気軽にすぐ見られるようになっています。ですから、文献館に行つて、紙焼きのものでしたら、コピーも自由にできますので、そういう形で非常に楽になったと思います。南方進出関係のものとか、海南島の開発などの史料としては非常におもしろいものが含まれています。そのほか、台湾政府では最近省政府というものが事実上なくなりましたので、そこに持っていた文書というものが文献館のほうに移管されています。日本史関係で言いますと、最近、私は専ら戦後のほうに関心が移ってきて、海外の植民地の引揚げとか、そういったことをやっていますが、この台湾省政府のなかに、日本資産の接収関係の文書、国民党が接収しまして、台湾省政府がそれを管理しているという関係の一連の文書などがかなりあります。あと、日本人の留用関係など、そういったものも入っております。これはまだ整理ができていない段階で、見られるかどうかというのはまだわかりません。ちなみに、台湾の場合は、

あとで言う中国もそうですが、一応図録とか、ガイドブックはすぐ作るんです。行って、それで見せてくれるかという、そういうわけでもなくて、一応うちはこんなものはあるんですよという宣伝は大好きなものですから、そういうものは出します。ちなみに、文献館は最近こういうものを出しまして、市販しております。これも一応お返しします。目録にはなっていませんが、見るものとしてはおもしろいです。

台湾では、そのほかに文献館の上部組織であります国史館というものがあります。これは總統府の直轄機関でありまして、国史館と中央研究院というのも總統府の直轄機関ですから、かなり権限が強い機関であります。それで、その国史館は中華民國政府の文書、これは北伐が完成したあとの1928年以降の文書、あとは、蒋介石の個人文書、これは大溪档案といわれている文書です。あと閻錫山の文書など、そのほか、国民党関係の要人の史料などを多数所蔵しております。北伐完成以前の北京政府時代や清朝政府の文書などは、中央研究院の近代史研究所にありますし、近代史研究所はそのほか国民政府の經濟部関係の文書、档案というものも所蔵しております。いずれも、いま、非常に自由に文書が見られるようになっておりますので、わりと苦労することなく、こういった文書は見られるようになってきております。そのほか、国防部のほうでは、国防部史政編訳室と。これはつい最近まで編訳局だったんですが、室に格下げになってしまったのか何かで、こういう形になっております。外交部の文書は外交部でも持っているんですが、このへんは独自のルートを使わないと、なかなか見せてもらえません。それと、本来は中華民國政府そのものの政策決定のなかで重要なのは、実は国民党の文書でありまして、国民党のほうは、いまは中国国民党の党史館(昔は党史委員会と言っていました)が所蔵しております。その場合も、見ることは可能ですが、個人的ルートを使っていけないと、なかなかうまくはいかないというのが現状であります。ざっと台湾、朝鮮というのはそういった形で、少なくともかなりの形で文書が見られるようになっていくということでもあります。次に満洲に移っていこうかと思いましたが、何かそれまでに聞きたいことがありましたら、言ってください。たぶんそのほうが答えやすいと思います。

伊藤 台湾の場合、文献委員会が南投県にあります、そこに行かないとだめですか。

加藤 はい、そうですね。

伊藤 台中の近くでしょう。

加藤 そうです。台中からバスで一時間ぐらい南のほうに入ったところです。

伊藤 CD-ROMもそこに行かないとだめですか。

加藤 はい。中央研究院がCD-ROMをもう一つ複製でとっているんですが、それは外部には見せてくれないです。

伊藤 僕も一度台湾省文献委員会というところに行ったことがあります、あの近所はあまり宿泊するところもないみたいのところですね。

加藤 何もなくていいところ。もともと中興新村というのは政府機関の疎開用につくられたところですので、いざという時に立て籠もりができるようなところですから、ないですね(笑)。

所澤 先生が行かれたのはいつ頃ですか。

伊藤 ずいぶん昔です。

所澤 それは黎明新村じゃないですか。

伊藤 ああ、黎明新村かもしれないな。

加藤 黎明新村の時代はまだ台中市内ですから、ちょっと外れで、いまはもっと山奥です。

伊藤 それは（笑）。

加藤 ですから、通うのは不便ですが、台中で泊まって行けばなんとかなります。

伊藤 蒋介石文書とか、閻錫山文書をご覧になったことはありますか。

加藤 はい。蒋介石の大溪档案というのは、いま、目録が2冊まで出ていまして、大まかにどういったものがあるかというのはわかります。蒋介石の日記という部分に関しては、公開はわからないです。ただ、ゆくゆくは出していくんじゃないですか。

伊藤 目録は漢字でしょうから。

加藤 それは見られます。これらは一般でも売っていますので、入手はしやすいです。

伊藤 目録ですか。

加藤 はい。

伊藤 閻錫山と蒋介石のほかに、たとえばどんな方のがありますか。

加藤 あとはかなり細かい国民党関係者の個人の史料が入っています。ですから、われわれはわからないんだけど、たぶん有名なんだろうなというか、そういう人まで含めて、かなりの数は入っています。

伊藤 どういうものを持っているかというのは、ホームページやなんかはあるんですか。

加藤 ホームページは一応ありまして、おおよそのことはわかります。

伊藤 それは台湾文献館で検索できますか。

加藤 台湾文献館でなくても、国史館で入れます。国史館でも見られますが、ただ、国史館もホームページはあまり充実していません。簡単なガイドブックで所蔵しているものの概要はつかめます。個人史料に関しては、人物档案の細かいどういう文書があるかというガイドブックが何冊も出ているんです。30冊かそれぐらいで、いまも毎年出ています。

伊藤 誰の文書があるかということはホームページでわかりますか。

加藤 有名なものとかは出ていますけれども、細かいレベルまではわからないと思います。ちなみに、蒋介石の文書は、2000年になって館長が張炎憲になってから、やたらと国史館はいろいろと対外的なアピールするようになりまして、史料集を出すようになってきました。影印版で、蒋介石関係の史料とか、国民党の対日政策関係とか、そういう幾つかテーマを作って、いま、史料集を刊行しています。台北の専門書の本屋さんとかに行けば。

伊藤 日本だったら、どこへ行けばいいんですか。

加藤 日本はどうでしょうね。取次店がどこまでそれを把握しているかでしょうけれども、たぶん台北で買われたほうがいちばん確実ですね。

伊藤 少々高くても、東京で買ったほうが（笑）。

加藤 閻錫山の文書もいま刊行を始めまして、翻刻が出ています。

伊藤 それは影印本ですか。

加藤 閻錫山のほうは一応活字に起こしています。まだ、初期の段階ですから、辛亥革命期ですけども、最近は国史館は戦後の部分に関しても、かなり史料集の翻刻を始めています。毎年行くと、次々といろいろなものが出ていますから、行ってみないとわからないですね。

梶田 朝鮮総督府の方ですけども、『政府記録保存所文書目録』はあまりないということですが、日本ではどこにあるんですか。

加藤 これは文化センターアリランの梶村文庫です。そこに梶村先生が向こうでコピーされたやつがあって、それは見られます。

伊藤 梶村さんというのは亜細亜大にいた人ですか。

加藤 朝鮮史をやっていた梶村秀樹さんです。文化センターアリランには、あとは海野さんが向こうに行ってコピーをとってきて、朝鮮総督府文書をまとめたものとか、そういうものも寄贈されていますので、いくつかみることができます。

次の関東庁に移りたいと思います。関東庁の文書ですが、これは一応残ってはいるとされています。大連市の档案館にそんなに数は多くはないんですが、253巻あるとされています。中身は警察署の史料だとか、かなり雑多な文書群になっていまして、朝鮮や台湾のような形でのまとまりではないんですが、少しながら残っています。あとは警察署の史料とか、憲兵隊の史料です。憲兵隊や警察署の史料というのは、「紙灰档案」といわれていまして、敗戦の時に焼いたんだけど、焼けなかった史料です。地中に埋めていたんですが、道路工事とかでたまたま出てきて、档案館に保存されています。紙灰档案というのは意外と中国の各地にありまして。

伊藤 シハイとは？

加藤 紙に燃えかすの灰です。真っ黒焦げのやつです。大連の档案館にあったやつは本当の真っ黒のやつを一枚一枚剥がして、何が書いてあるかを全部筆記して、それをちゃんと書いている作業をしているというのは見せてもらいました。それは見る分にはおもしろいですが、中身はどうかというのはちょっとわかりません。燃えかすのような史料というのは、あとで吉林省のことでちょっと触れます。関東庁の史料というのは、こういう形で少しだけあるんですが、残念ながら、これは大連の档案館はいま行ってもみせてはくれません。ガイドブックのほうではあるということは書いてあるんですけども、あるんだったら、みせてくれるだろうと思って行くと、だめだよというので終わりと。何度か足を運べば、そのうちみせてくれるかもしれないという気の長いことが必要になっています。おそらく関東庁の史料というのは徹底的に焼却処分されたと思いますので、あまり残されてはいないと思います。

そのほか、樺太庁のことですが、これはいまのロシアの国立サハリン州公文書館にあります。ユジノ・サハリンスク、昔の豊原に残されています。ただ、これも割と量的には少ない文書です。樺太庁以外に、王子製紙や樺太鋳業などの会社文書もありますが、そういうのも含めると、1600点弱であります。これは公開されていますが、ロシアの文書館というのは、割と公開はされているけれども、見るまで大変というのもありまして、行けば必ずというわけではないと思います。目録も作成されておりますので、割と当たりやすいです。昔、これは北海道の開拓記念館

がパイプになって、サハリン州公文書館と文書の調査をやっていたんですが、いまは開拓記念館のほうでは、担当の人が移動していなくなってしまったので、ルートが切れてしまって、残念ながら進んではおりません。たまに北海道の道立文書館とかの方とかが調査が入るんですが、系統だった形での調査はいまはされていません。ただ、一人、井澗さんという人がいまして、この人は北大の建築の大学院を出た人ですが、まだ就職が決まっていなかったのかな。その人は個人のホームページで、サハリンで文書調査をいまして、彼がホームページのなかで文書目録を公開しております。アジア経済研究所が出している『アジア経済』のなかに、彼は投稿しておりますので、もうそろそろ出るとは思います。基本的には彼の個人のホームページで中身は見ることはできます。ちなみに、一応全国樺太連盟が日本財団のお金で調査を何年かやっていたことがあります。その時につくった件名の目録がありますので、これもちょっと回します。樺太はこんな形で、概要というのはいまはだいたいのことわかるようになっています。

そのほか、南洋庁のほうですが、これはまったく所在不明になっています。場所自体が戦場になってしまったということもありまして、一体焼けてしまったのか、アメリカ軍が接収したのかわからない。それと、問題なのは、南洋庁があったコロール島というところがあるんですが、それは実際には戦地にはなっていないで、そこをどういう形で米軍が占領をして、その文書を接収したのかという過程ははっきりしないんです。だから、南洋庁に関しては、いまのところ、まったくわからない。これ自体、研究している人も少ないので、あまり情報も入ってこないというのが現状です。

続いて、満洲国と満鉄の話も進めていきます。満洲国の政府の文書に関しては、いま、吉林省档案馆に所蔵されております。これは中国の特に東北部の档案馆で共通することですが、日本関係の史料というのは原則的に見せてもらえないという形になっています。ただ、中国の場合はいろいろな形で建前と本音が違うことがありますので、額面どおりは受け取れないんですが、少なくとも個人の資格で行っても見せてもらえないというのが現状です。ちなみに、満洲国政府においては、ほとんどが敗戦の時に焼却処分されていますので、あまりないです。しかし、若干、経済部や産業部などの史料が残されています。東北の各地方の档案馆で多く残されているのは、こういう政府本体の史料ではなくて、地方機関の公署といわれるところの文書です。これは割と残されておりまして、吉林省の場合は、吉林省公署の档案など、たくさん残されています。吉林省档案馆のなかでは、いま、早稲田の小林先生と僕とで調査しているのがありまして、これは関東憲兵隊の史料になります。さきほどいった紙灰档案——敗戦の時に書類の上にガソリンをぶっかけて焼いたんだけど、焼け切れずにそのまま穴に埋めておいたのが、戦後になって、どういう訳だか出てきたという史料です。この関東憲兵隊に関する档案をいま調査しておりまして、これはなんとかして公開のほうに持っていきたいと思っております。吉林省档案馆の目玉は満洲中央銀行の档案です。そのほか、幾つかの国策会社と三井物産の史料などが入っています。

伊藤 巻と書いてあるのはなんですか。

加藤 档案馆とか、中国の場合はみんな巻ですが、だいたい一冊という形です。

伊藤 冊の意味ですか。

加藤 向こうは全部冊ではなくて、巻で表しています。

伊藤 第何巻という意味ですね。巻物になっているという意味ではないですね。

加藤 ええ。一応ファイルされています。満洲国のほうでは、そのほかに遼寧省や黒竜江省の檔案館にも若干の文書が残されていますが、基本的にはあまり残っていないというのが現状です。ですから、吉林省の場合は、メインになるのは満洲中央銀行の史料です。これは一時期行けば見せてくれたんですが、最近はまだ見せてくれなくなっています。中国の場合は、この前見せてくれたのに、今回行ったら見せてくれないとか、この前は見せてくれなかったけれども、きょうは見せてくれるなということがよくあります。行ってみなければわからないという、非常に面倒臭いというか、時間がかかってしょうがないということがあります。それと、さきほど言ったように、個人が単独で行っても、絶対にそれはみせてもらえないです。檔案館の館員と個人ルートを活かしてなかに入っていかないと、基本的にはみせてくれません。だいたい10のうちの史料が見られるのは1で、あとの9ぐらひは飲んで食って騒ぐというぐらひで、非常に無駄というか、気の長いことをしないと、なかなか史料に辿り着けないというのが現状です。

ついでに、満洲国政府の話をしたから、満鉄の史料も触れます。満鉄については、遼寧省檔案館に保存されています。この文書自体も実は非公開で、普通に行って、閲覧室で申請しても、「そんなのはだめ」と言われるのがおちになっています。あとは、ここに目録のタイトルが書いてありますが、『日文資料目録』の上下巻が遼寧省から出ているんですが、これ自体は基本的に中身は満鉄が発行した刊行物などが中心で、別段、これは日本でも見られないわけではないという、絶対ここしかないというものは非常に少ないです。あえてこれだけを見に行くのは非常に無駄というのが現実です。実は遼寧省檔案館のほうでも、オフレコとか、ぎりぎりになってきますが、ここにある満鉄の文書は鉄路総局のものだといわれていますが、実際は満洲国が崩壊した時に、ソビエト軍が接収した満鉄関係の文書が中国に返還されたそうです。中国に返還されて、周恩来が命じたらしいんですが、幾つかの機関に散らばっていたものを一ヶ所に集めた。それが遼寧省檔案館に一ヶ所で集中保管されることになったという档案です。中身としては、社長室の秘書課の史料から始まって、満鉄調査部の史料とか、満鉄の組織すべての史料を網羅しているもので、非常に中身としてはおもしろいものになっています。しかし、これ自体はさきほど言ったようになかなか見せてはくれない。以前、1990年代に入って、遼寧省檔案館に最初に入っていたのが小林英夫さんですが、小林先生が向こうの人とタイアップして、二つの史料集を刊行していました。しかし、これも幾つかの問題が起こりまして、現在はこれで中断されています。遼寧省檔案館のほうでは、90年代の後半になりまして、自分たちで史料集を作って、自分たちで売り始めます。それで、最近になっても、史料集をばかすかと出すようになってきてまして、これはすべて満鉄を使った文書です。それ以前の80年代とかは、満鉄の史料を中国語に訳して編集した史料集というのをつくっていたんですが、最近は全部影印版で翻刻しております。向こうの翻刻のやり方というのは非常に荒っぽいもので、一体どこのファイルにあったものかというのは全然わからないです。ただ、その史料があるというだけはわかるという史料集のつくりになっています。

実は、この満鉄の史料を巡っては、いろいろと言われるところがありますが、基本的には、中

国でなぜこれが公開されないかという話になりますと、満鉄という文書は非常に扱づらいというか、いろいろ政治的な問題が起こりやすい文書だと。どうしてかと言いますと、要するに、中国の東北地方の開発とか、経済発展のなかで重要になったのが満鉄で、満鉄の文書を使っていくと、中国の経済発展とか、開発の問題に関して、満鉄は非常に大きな役割を果たしたという結論に達しやすくなるんです。そうになると、いまの中国のなかではあまり好ましいことではなくなるので、そういったことが、いま、満鉄の史料はあまり公開されない原因の一つになっています。中国で満鉄の研究をやっていたのは蘇崇民という人と解学詩という人ですが、その人たちが一時期満鉄の史料を公開して研究を進めようとしたんですが、上からストップがかかりました。実際、そういう問題があるということで、実は中国の東北で満鉄研究をするというのは、いま、非常に難しい位置に置かれています。だから、なかなか出ないということです。非常に政治的にナーバスな問題が含まれていますので、満鉄の文書はなかなか出てこないんじゃないかという感じです。遼寧省は、ほかにも、憲兵隊の史料とか、満洲国の警察関係の史料も所蔵されていますが、そんなに数的には多くはありません。

ちなみに、さきほどの吉林省もそうですが、档案馆指南というのを中国の各省が出しています。遼寧省も黒龍江省も全部あるんですが、きょうはちょっと重いので吉林省だけを持ってきました。カイドブックというのは向こうの人は好きなので、すぐ作るんです。満洲時代のこういう档案があるというのをば一つと書いて、全容はこうだというのを全部書くんですけども、これで見せてくれと言うと、あるというだけで終わってしまうという問題があります。ですから、中国東北のほうで問題なのは、こういう日本時代の史料と、もう一つ問題になっているのは国民党時代の史料です。一時期、国民党が支配している時期の档案も見せてもらえないです。これは両方とも非常に政治的な背景があるということです。

档案馆の問題では、実は日本でいうと、档案馆というのは公文書館かなとか、文書館かというイメージで捉えられますし、ある人は歴史資料館かなと思うんですが、そういうふうに思っ入っていくと、えらい目にあうというか、難しい問題にあいます。どうも日本人のなかでぴんと来ないのは、この档案馆という組織の問題です。実際は、档案馆というのは、日本時代の史料とか、もっと昔の史料というのには付け足しであって、別段問題ではないんです。なぜ外国人が関わるのが問題になってくるのかと言いますと、これは現在に至る個人ファイルを保管している共産党の直轄機関になります。ですから、吉林省の档案馆も遼寧省の档案馆も、共産党の省の本部の敷地内に入っていて、そこに入るまでにチェックを受けて入っていくというシステムになっています。要するに、その地域にいる人の個人データすべてを管理している。ですから、そこに外国人がうろちょろされるというのは、実はあまりいいことではないわけです。そういったこともあって、手続きを踏めば見せてくれますが、それ以上にいろんなことをするという事は非常に嫌がられるというのが現状です。そのへんを知らずに行くと、えらいことになります。

満鉄のことで、遼寧省以外にほかに何かあるかと言いますと、吉林省の社会科学院に満鉄資料館というのがありまして、これはさきほど言った解学詩という方が本当は個人で集めていたものです。文書類が各地に散らばっていたり、屑屋で売られていたものなどを掻き集めまして、一つ

の資料館をつくったという経緯です。ただ、これは系統だった形でまとめられていませんので、文書類というより、むしろ刊行物が中心になっております。ここも組織的に位置づけが非常に曖昧な資料館でありまして、そういう問題があるために、なかでいろいろとごちゃごちゃとしたことがあります。ここも万博基金からお金をもらって、史料目録をつくって、いま、3冊ぐらいですかね。いまは日本財団からお金をもらって、最新の目録をつくっております。確か、来年度ぐらいには出るのではないかと思います。ちなみにここには慶応の経済学部の松村高夫さんとか、柳沢さんたちが調査に入っていて、いまはもう終わりましたが、ずいぶん昔からずっと調査をやって、史料集や論文集を作っていました。そのほか、中国の各地に市レベルまで档案館がありまして、鞍山とか撫順などの満鉄系列会社などは、それぞれの鉱山の档案館などが持っております。

次に大連市図書館のこともちょっと触れておきます。大連市の図書館というのは昔の満鉄の大連図書館を引き継いだものです。ほとんどが図書類ですが、ちょっと製本されてしまいますと、図書扱いされていますので、文書というのがたまに混ざって残されています。ですから、意外とおもしろいものがあったりするケースがありますが、これはつい最近まで見られたんですが、日本人は閲覧停止ということで見られなくなっていました。これはあとでも話をしますが、基本的には、問題は日本人側の研究者の態度にありまして、要するに、中国のそういう档案事情というのは知らないで、てんで勝手になんでもござれで、あるものをじゃかじゃかとコピーして、それを日本で出版してしまったり、そういうことをすると、中国の公安関係のなかでひっかかることがあるんです。そうすると、機密を漏らしたじゃないですけども、いろいろと言われる時がある。大連の場合はそういうトラブルがありまして、これはある日本人の方が関わっている。それでちょっとトラブルになって、いまは見られなくなったというケースです。ですから、割と中国の場合は気をつけてやらないと、えらい目にあうということです。

今回は、中国の大陸部のほうはあまり話していませんが、日本時代の史料で個人的に気になっているのが一つありまして、北平の総領事館文書というのがあります。これは元北京大使館の文書でありまして、中華民国を承認したあとに南京の総領事館が大使館になりましたが、北平の総領事館が大使館時代の文書も全部持っていたみたいで、敗戦後に国民政府に引き渡した経緯まではわかりますし、引き渡されたものもリストとしてすべて確認はとれているんですが、これはそのあとどうなってしまったかなということで、台湾のある方に調査をお願いして、外交部とかで調べてもらっていたんですが、どうも台湾のほうにはないらしいと。中国の南京の第二歴史档案館にあるのかなと思って、そちらのほうでもいろいろと確認しているんですが、どうもはっきりしない。これはまだ結果がわかっていない話ですが、これはどうなってしまったかなというのは、いま関心があるところです。海外の話はそんなところですが、翻って、国内の話のほうに移っていきたいと思います。いままでの話で何か質問がありますか。

伊藤 中国の場合、基本的にみられないというのであれば、いくら話してもね。食べられないお菓子の絵をみているような感じで（笑）。

加藤 そうですね（笑）。実際、いろんな手立てを使わないとなかなか見せてくれないのは事実

です。その話はあとでもちょっと触れます。

先に進むとして、では国内にある植民地関係の史料としては何があるかと言いますと、各植民地は東京出張所とか、東京事務所というものを東京に構えていたわけです。朝鮮総督府の東京事務所の文書というのは、外交史料館に入っているとされています。これは河村ファイルという河村さんがまとめたなかに入っています。ただ、いま現在、どれが東京事務所の文書だったのかと辿っていくという事はできない形になっているので、残念ながら、一体全体もとの原状はどうだったのかはわからない。台湾総督府の東京出張所は敗戦直前に空襲で焼けてしまいましたので、多くの文書はなくなったとされています。ただ、敗戦後の残務整理事務所の文書は、いま、外務省の外地整理室のほうで残されています。そのなかに若干台湾総督府の戦前の部分の史料というのがあります。情報公開法の関係で、私は一回請求して見せてもらったことがあります。そのほか、まとめたものとしては、樺太庁の東京事務所の文書で、これはいま北海道立文書館のほうに移されて、すべて見る事が可能です。これはもともと外務省が持っていたものを、昭和40年代ですか。北海道庁がもらいたいと申請して移管されたものです。昔のものはそんなにないんですが、割と昭和の戦時期の文書という形で、何冊かのファイルにされて残されております。あとの関東庁や南洋庁に関しては、全然不明で、残務整理事務所関係のは外地整理室のほうに若干あります。満洲国の大使館というのはどこかという、それも全然わからないです。そのへんはかなり所在が不明になっているケースが多いです。

そのほか、中央官庁として植民地を取りまとめていた拓務省の史料はどうなったのか。これも非常に心許ない話で、最近、ご承知のとおり、茗荷谷研修所にあった旧蔵記録が公開されましたが、これは拓務省や大東亜省、興亜院といったものを外務省が戦後に引き継いだものが公開されたものです。しかし、茗荷谷研修所の旧蔵記録というのは非常に偏った構成になっていまして、どうもこれは外務省に移る時点なのか、外務省に行ってからなのか、あくまでも僕の推測ですが、かなりの形で選別されているのではないかと思います。要するに、弾かれた部分というのはどうなったのかは全然わかりません。それともう一つ、自治省があった人事院を壊すという時に、94年に内務省の文書がいっぱいあったんだという新聞報道が一度ありました。内務省の文書のなかに、昭和17年に内務省に拓務省の一部分が引き継がれますので、旧拓務省の文書が紛れていると言われていたんですが、この新聞報道以降、一体どうなってしまったのか。総務省に問い合わせたんですが、その時に総務省の回答としては、これも情報公開法絡みで一度請求した時に、「請求されても、ないからできません」と言われて、「ええ、そうですか。なぜですか」「いや、もうそれは捨てちゃったんですよ」と窓口であっけらかんと言われて、「そうですか」としか言いようがなかったと。ただ、僕もあの時から確認をしていませんので、もう少し掘り下げて、本当にそうだったのか。だったら、総務省になる前の時に誰が決定したのかと、また調べてやろうかと思っています。そんな感じで、これも非常に心許ないです。

そうなってくると、残されたものは関係者の私文書を発掘するしかないなという話になるわけです。これは早稲田のほうで関わりました堤康次郎という西武グループをつくった人物の史料を、たまたま私がみることに恵まれまして、それを整理して、早稲田のほうに移管した経緯がありま

す。もともとは別段鉄道に興味があったわけではなくて、戦前、永井柳太郎が拓務大臣をやった時に、彼は一度拓務政務次官をやっていたんです。その時の関係があって、ひょっとすると、堤のところには拓務省関係があるかもしれないということで、幾つかアプローチをした結果、出てきた文書です。実際、この文書のなかには、かなりの数の拓務省関係の史料が残されていました。彼の家自体が戦災から免れたということもありますし、もともと事業もやっていた関係で、彼の手元にある史料はかなり系統立てて整理されていました。要するに、堤自身はやらなくても、周りがやっていたというのがありまして、そういう関係で、かなり私文書が良好な形で残されていた。それで、拓務省の史料をみることができました。拓務省部分に関しては、一回植民地研究のほうで発表したことがあります。話がだいぶ外地の話からずれていくんですが、麻布の米荘閣という西武グループの保養施設がありまして、結婚式とかをやれるようになっているんですが、隣に堤清二さんのお宅がある。本来はここが堤家の本宅だったんですが、康次郎が亡くなって、奥さんの操さんがしばらく住んでいて、操さんが亡くなったあとに、西武グループの保養施設に建て替えてしまった。建て替えのときに堤邸の端っこに土蔵がありまして、それも取り壊しになると。土蔵を取り壊した時に出てきたのがこういう一連の文書であります。文書が出てきて、それを慌ててダンボールに入れたんですが、僕が入った時の概数でいうとだいたい88箱ぐらいのダンボールです。ダンボールといっても、小さいダンボールではなくて、かなり大きなダンボールでして、それが88箱でしたから、かなりの点数になります。

その史料自体は、その後、西武関係者の人たちのなかでとりあえず仕分けがされて、仮目録がつくられて、そのあとに堤康次郎の伝記を作ることになりまして、明治の由井常彦さんが中心になって、伝記編纂が行われた。伝記編纂が行われた時に、その文書が使われたんですが、実はその手当てはしなくて、そのままになってしまった。伝記編纂自体は完成して、本はできた。本はできたけれども、史料はそのままに、ある意味で放置されていた。地下にこういうフロアが幾つかありまして、ちょうどこれの3分の2ぐらいのスペースに全部史料が埋まっていたんです。僕が入った時に子守をしていた人がいまして、その上司の人も、「いや、これは伝記ができたから、もうどうにかしたいんですよ」という話で、「じゃ、折角ですから」と。それまで、拓務省関係のはみせてもらっていたんですが、ほかのもあって、もったいないというのもあったので、堤自体が早稲田の出身だということと、たまたま僕は大学院の時は早稲田で、近代史のなかで安在先生が大学史の資料センター長という形でいましたので、話を通しやすかったので、安在先生を通して、大学史の資料センターに引き取るという手筈になったわけです。大学史のほうに移管されて、そのあとに実際の整理が始まって、目録が作成されていくんですが、いまになってみると、これはいろいろと問題がありました。本当はとっくに目録もできまして、整理も終わっているんです。2年前にはすでに終わって、公開できる段階になっていた。最終的には堤清二さんのほうから早稲田のほうに寄贈するという手順になって、その時の条件として、一般的に学術に広く公開するという条件で寄贈されました。

しかし、そのあとに、オフレコにして欲しいんですが、いろいろと早稲田もセンター内でも人間関係とかぐちゃぐちゃしたところがありまして、結局、整理はしたんですが、そのまま放った

らかし状態になっている。かといって、全部資料番号を振って、棚にも全部配架して、目録もつくりましたので、請求しようと思えばできるはずですが、どうもそこから先のことをやらない。なぜかと言うと、あのなかで誰か別の人が「個人情報が入っているから、プライバシーの問題じゃないか。それを選別することが先だろう」という変なことを言い出しまして、20,000点ぐらいあった史料を全部引っ繰り返して、どれが個人情報に当たるのかというのを始めてしまったんです（笑）。そのへんになってくると、さすがにあちらの組織の問題ですから、僕はただ単に整理して目録をつくるまでの話ですから、そこから先のことはタッチできませんが、側からみても変な話です。

例で言いますと、敗戦直後に西武が糞尿処理の鉄道をやっている時に、その時に政府のなかで糞尿処理方法で名案だということで、変わった貨車をつくって、その図面みたいなちょっとした史料があったんです。これは特許法に違反するんじゃないかということになって（笑）、法学部の先生かなんかが入って、「これは特許に当たるかもしれない。これは30年か50年は閲覧停止にしよう」とか訳のわからんことを始めてしまったんです。そうすると、個人の手紙とかが次々と引っ掛かる。要するに、お金を貸してくれとか、金に困っていると、堤のはそういうのが多いんです。それは全部プライバシーの問題だという話になってきてしまった。そういうことを始めてしまって、にっちもさっちもいかない。全体的にそうなってくると、なんだかんだと外野は訳のわからんことを言い始める。あとは大学のほうも、いま、125周年かなんかの記念事業があって、実はそれを使って、金儲けをしたいということをちょっと総長は考えたのか。清二さんは東大ですが、義明さんは早稲田なんです。どうも義明さんのほうからお金が欲しいということを考え出して、これはなんとか金にならんもんかということで、総長派の先生を呼んで、何か策動を始めてしまったものですから、余計訳がわからない。そうすると、結局、あの文書自体は非常に宙に浮いてしまっているんです。

実際は、僕も腹が立ってきたので、これだったら、別のところに持っていけばよかったなと思ってるんですが、外部から幾つか圧力というか、目録はできているわけですから、それで、みせてくれということをしつこいぐらいやっていくしかないんじゃないかと思っています。目録自体も、最初はえらい大盤振舞で、100か200冊ぐらい作ると言われて、ああ、そうですかと思ったら、つくったら、10冊もなかったです。作った私のほうにも回って来ないぐらいで（笑）、一切見せたくないというのがあります。ただ、あそこに行けば、目録は置いてありますので、見せてくれと言えば。

伊藤 これは中国と同じじゃない（笑）。

加藤 私は母校のことは言いたくないんですが、そういうおかしな問題があります。確かに史料機関でちゃんと慣れていないところがやり始めると、そういう訳のわからないことをやり始める。それこそプライバシーの問題と言ったら、私文書なんていうのはほとんど引っ掛かっていってしまうし、そういうことの「てにをは」から知らなかった。まず、史料整理のいろはから知らなかったの、それから始めたんですが、その問題が非常に多いですね。これは外部から幾つか圧力をかけてもらったほうがたぶん出てくるんじゃないかと。そうやって周りでやっていけば、責任

問題だぞとなる場合にはたぶん動くというおかしな方法になっています。

伊藤 プライバシーの問題は、利用者責任の問題にしてしまえばいいことなんでしょう。

加藤 そうです。利用者責任の問題ですし、通常は史料を持っているところは、そういう手立てをするはずですが、それを全然いままでしていなかったとなつて、問題になったわけです。

伊藤 そんなことを言ったら、早稲田でほかに持っている史料だって、みんな引っ掛かってきますからね。

加藤 そうです。ただ、そのへんの横断的な考えはないから、そのセクションだけの話になってしまいますから、おかしな話なんです。

伊藤 中国に侵されてきた（笑）。

加藤 なかなか変てこりんな話になっています。ついでですから、早稲田というところは組織が大きいために、隠れてしまっている史料はかなりあるんです。

伊藤 あるみたいですね。僕もその噂は聞いています。

加藤 いちばん問題になっているのは、旧社会科学研究所がなくなって、いまはアジア太平洋研究センターと名称だけが変わっていますが、実際は途切れています。社会科学研究所が廃止になって、持っていた蔵書とか史料が全部中央図書館に引き渡されました。図書類は整理されて、本館のほうに入っていったんですが、問題になったのは史料で、現物史料のうちの廃止になった段階までに目録ができていたものは整理ができていたので、特別資料室のほうで目録が備えつけられて、一応見ることはできます。ただ、それ以降に購入したり、何かして集めていた史料がありまして、その場合は目録ができていませんので、一切公開されないというか、ないことになっている。特別資料室の図書館の人にも、突然これを預かってくれと言われて来たものですから、別段それをやらなければいけないということではないんです。問題なのは、所有権を確定した上で引き継ぎがあったわけではなくて、なんとなく社研からこんなのが出てきたから、ちょっと置いてよという形で預かっているのが多いんです。

僕がいま、公開の方向でなんとか動いているのは、山崎元幹という満鉄の総裁の文書です。彼の文書は小田原と憲政資料室にあって、そのほかに僕が別のところで論文を書きましたが、アジア経済研究所にあり、そのもう一つの片割れが早稲田にあります。早稲田にある部分は、実はさきほどの満鉄研究と被ってくるんですが、苦勞して、中国へ行って満鉄の文書を見るのではなくても、日本でもできないことはないんです。それは大きな理由は山崎の文書というのは、ちょうど早稲田にあるものは戦時中で本当に末期までの文書です。満鉄が最後を迎えるまでの段階の史料です。全体部数としては少ないんですが、内容としては、非常に重要な部分です。社会科学研究所時代に購入したんですが、それを購入しっ放しでダンボールに入れたまま本棚のどこか隅に置いてあったやつなんです。それは社研が解体する時に、これも図書館に引き取ってよということで特別資料室に移されたんですが、特資のほうも特資で、移されたんだけど、預かってよと言われたから、何もしようがないし、ましてや、特別資料室というのは、図書館の人ですから、重要文化財とか、重要美術品というものがあそこにだいたい置かれているんです。そういうもののランクに比べれば、それは確かに文化財でもなんでもないので、どうしても視野の外に

置かれる。ですから、そういう形で、金庫のなかに放ったらかしになっているんです。社会科学研究所というのは、組織のわりには幾らか予算はあったものですから、史料は買い込んでいます。買い込んでいたけれども、結局、買い込むだけで、誰も整理もしないし、見もしないという状況が続いていて、伊東巳代治の史料とか、いいものをかなり持っているんです。古書店から断片的に買っているのが未整理のまま放置されている。そういうので、個人の文書もかなりの形で入ってきて、これはいつか特別資料室、図書館のほうと交渉してなんとかしたいと思っています。そういう形で、早稲田というのは、変なところに変なものが放置されています。

伊藤 社会科学研究所で、先生が個人で預かったりなんかして、そのままになってしまったというふうなものもあるようですね。

加藤 はい。

伊藤 石橋湛山文書なども、もともとはあそこに入っていて、危ないというので、西尾林太郎氏が持ち出して、憲政に持っていったという経緯がありました。あまりこれだと、危ないなど。ほかにもいろいろあるんだという話は聞いておまして、この間から、アジア太平洋研究ですか。

加藤 研究センター。

伊藤 一緒に引き継いだのかと聞いたら、いや、引き継いでないということで、どこに行ったらこのへんはありますか。

加藤 アジア太平洋研究センターは、基本的にあそこの教員は移ったんですけれども、資料や図書は一切置かずに図書館に任せたんです。もう一つ問題なのは、あのなかでも持っていったものがあるんです。東南アジア関係の史料はアジア太平洋研究センターのほうに持っていかれています。ですから、それは図書館にはないです。

伊藤 早稲田における情報公開がまずないんですね。

加藤 いろいろとごちゃごちゃになっているのがあって、山崎の史料はたまたま整理する機会に恵まれたのでやれたんですが、それ以外でもありますし、刊行物で一つのコレクションになっていたのは、植民地関係の機関が幾つか発行していた刊行物が戦前から集積されていて、かなりのコレクションになっていたんです。それ自体はあそこが廃止された時に、本館に直接送られなくて、本庄に図書館の倉庫がありまして、いらぬ本とか、困った本はみんな倉庫に野良積みにするというところがあって、そこに一時期野良積みにされていまして、小林先生がいろいろと尽力されて、なんとかそれを図書館のほうに持ち込んで、捨てられずには済んだという経緯があったものですから、放っておくとどうなってしまうかわからないというのがあります。所沢と本庄というのは、重複本とか、使用頻度が低いものとか、傷みが激しいもの、あとは退職された先生が寄贈されて、だぶっているから本当はいらぬというようなものをとにかく一時的にあそこに全部押し込んでしまっています。

武田 数年前に新聞に出た早稲田の図書館で政治記者のOBかなんかがやっていた日本政治文庫と聞きましたか。あれはいま活動されているんですか。

加藤 どうなんでしょうね。あれからあまり聞きません。図書館はあとは漫画文庫とかをぶちあげて、コレクションを作ろうとはしていますけれども、実際、ああいうのをもらっても、整理す

るスタッフがいないんです。そこらへんは、ぶちあげるのはいいんですけれども、中身が伴っていないです。

小宮 旧社研の話で一つお聞きしてよろしいですか。そちらから出ていた本のなかで、中島彌団次であるとか、久原房之助に対するインタビューをされたのが活字化されましたね。

加藤 はい。

小宮 あれだけを読んでいると、個人に対して行ったというより、政治家とか、系統的に行っていたような形跡はありますが、そのテープとか、それ以外の政治家に対するインタビューの記録みたいなものはどういうふうになっているのでしょうか。

加藤 一時期、「社会科学討究」（早大社会科学研究所『社会科学討究』41（2）、1995年）のほうで何回か連載されたやつですよ。

武田 一回じゃなかったかな。

小宮 まとめて、3人分だけ。

加藤 久原とかが入ったやつで、ただ、あの関係の史料は全然ないですね。要するに、事務的な関係の史料は一切なくなっている。そうすると、関係者に聞くしか手立てがないというぐらいですね。

伊藤 関係者はみんな死んでいるんです。

加藤 だいたい死んでしまっていますね。旧社研の史料選定とか購入は、あそこもまた変わった人ばかりが行くところですが、そのなかで、ちょっと変わった事務の人がいて、その人が自分で古書目録をみて、おもしろそうだということを注文して買っていたんです。教員が関わるというより、むしろその人が個人的に集積していったというところがあります。だから、そういう個人の人しか知らないというのが非常に多いんです。大学史センターのほうに、望月さんという僕の大学院の先輩がいるんですが、あの方は社研の助手時代に、幾つかの文書の収集というのをやっていて、あの方がいちばん知っているんじゃないかなと。

伊藤 その人はいま何をやっているんですか。

加藤 いま、大学史資料センターにいます。あの方は集めるのが好きなので、そういうのはやっているみたいです。

ちょっと話がずれましたが、そのほか、韓国や台湾というのは90年代になってずいぶんと状況が変わってきています。とにかく器ができてくるというのと、中身の組織が整う。それと、人材が養成される形で、ある意味で日本以上に進んでいる状況にあります。中国においては、同じように档案法というのがあるんですが、これはまた運用によっては別ですが、とにかく韓国や台湾というのがずいぶんと状況が変わってきております。

日本のほうとしては、幾つかの課題として挙げておきました。特に中国東北の調査に関してですが、幾つかのグループというのが分流、乱立している状況です。それぞれが実は全然連携しておりませんで、情報もまったく入って来ない状況で進めている。それと、最近面倒臭いのはN-GOと称する人たちが入ってきてしまっているんです。彼らが狙いとしているのは何かというと、ひとえに七三一部隊ですけれども、その史料で何かとごちゃごちゃした問題を起こされてしまう。

NGOの人たち、要するにNGOが単独にするのではなくて、何人かの研究者が絡んでくるんですが、そういう形で、ドカドカといろんな档案馆に入ってくるんです。彼らは金を持っていますので、最終的には中国のいまの状況というのは、史料が見られるかというのは金次第です。金を積めば見られる。金がない人は見られない。どうしてもそういう拝金主義的なところが横行してしまっている。要するに、値段がつり上がっていつてしまっている状況にあります。そういう形でいろいろと団体が入ってみていると、折角交渉して、見られないのをなんとか見て、それをマイクロフィルムにする値段交渉にどうしてもいつてしまうんですが、それをなんとか下げてという時に、ほかの人が来て、えらい大枚をはたいて買うよと言って来られてしまって、一気にぼんと上がってしまう。そういうおよそ研究とは無縁の世界が繰り広げられてしまう。そういうお金にまつわる問題、大連の図書館の問題も言いましたが、そういった史料公開に対して、日本人側の研究者は非常に無自覚なところがありますので、トラブルが起こりやすい。そういうような問題をどうにもこうにもクリアしないことには立ちいかないというのが事実だと思います。

そのほか、今回、伊藤先生のプロジェクトのほうで関係してくるのは、史料情報のネットワーク化の問題ですが、そのためにも、共同作業をどうにか組織化していかなければならない。いままでどうしても研究者として見に行く立場ですね。それで、向こうは提供してくれるという形でしか関係はなかったんですが、台湾はまだそこまで進んでいませんが、少なくとも韓国においては、非常に現場の人たちのレベルが上がっていますので、そういう人たちとただ単に「見せてください」「どうぞ」という関係ではなくて、お互い何かをやっていくというふうに提案していかないと、これからは進んでいかなんではないか。韓国のほうも、アーキビスト教育というのが非常に進んでいて、向こうの人たちはむしろ歴史研究者が入ってくるのを嫌がるという傾向があります。要するに、韓国の歴史研究者も嫌だと。なぜかという、彼らは史料を使うだけで、史料そのものに対して何かするというわけではないから、できるだけあまりやりたくない。ですから、そういう意識を持っている彼らと接するんだったら、「使わせてくれ」「どうぞ」というのではなくて、その史料をもとになんとかお互いに何かできないかということ提案していくということがどうしても必要になってくるのではないかと。まだこれから先だと思いますが、台湾もよりそういった方向に進んでいくケースがあるんじゃないかと思います。

そういった流れのなかで、ネットワークとか、技術的な問題などをどうやっていこうかというのは、ここには出してきましたが、欧米とかは電子情報化に対応したアーカイブスの標準化という動きが幾つか出ています。必ずしもこれがすべてでもないですし、統一された基準ではありません。ISADやISAARやそれに対応したEADやEACという形での問題提起というか、動きというのは非常に進んでいる。欧米のほうはどんどんそういう形で記録標準化という議論が進んでいる段階で、日本側がそれに対して、日本側の史料や東アジアの史料の特殊性というのをどうやって訴えていくか。ある程度訴えていかないと、どんどん世界標準のようなものが作られてしまう。それは基準としては、彼らは欧米の史料をもとにした基準にしか過ぎないので、それが世界標準化されてしまうと、恐らく日本の史料とか、こういったものが持つ多様性というのがどこまで対応できるかというか、それが全然使い物にならないといわれてしまう恐れがある

わけです。欧米で進んだような話などもどんどんと吸収しながらやっていかないと、これからは大変なのではないか。ちなみに、こういうアーカイブスの電子情報化でいちばん進んでいるのは、オーストラリアとか、イギリスです。ここにちょっとHMC のNRA というシステムのことを出しましたが、これはイングランドの幾つかある史料情報をネットワークでつないで、どういうものがあるかというのを全部検索できるようなシステムになっています。いま、パブリック・レコード・オフィスと一緒に、ナショナル・アーカイブスという大きな組織になりましたが、そのなかのHMC のほうには、イギリスのいろんな地方で出された目録とか、そういった史料目録を提供するように法律でも義務づけられていまして、HMC に自動的に入ってくるんです。それを全部集めて、コンピューター化して、全部史料ネットワーク検索システムを作るという非常に作りやすい環境になっています。ですから、日本もどこかがそういう目録情報でも自動的に集まるようなシステムを作っていないと、なかなか大変ではないかと考えています。次に史料館の話もしますが、史料館でもちょっとそういうことをやろうかといって、今年から、そういった電子情報化のことをやろうといまはしているところです。

附録としてちょっと触れておきますが、私が所属しております国文学研究資料館史料館ですが、ここに大方の人のイメージでいうと、近世文書が中心だという印象が強いので、どうも近代の人はあまり来てもらえないんですが、実際は、幾つかみていくと、近代の史料というのはありまして、たとえば有名なのは、文部省の調査局の史料です。宗教制度調査会の史料とか、あと、愛知県庁の文書です。県庁文書としては、かなり貴重な文書です。それから、群馬県庁の文書、あと、「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」は渋沢敬三さんが集めたアチックミュージアムのととは別のコレクションです。渋沢さんのほうから寄贈していただいた史料で、公開されていますが、渋沢栄一の日記の原本は実は史料館のほうに入っています。あとは薄井福治の『大日本維新史料』の編纂稿本とか、岡谷繁実の「岡谷繁実聞書」と「征西史料」は西南戦争関係の史料です。西南戦争とか、同時代のいろんな聞書集とか、いろんな風聞、風説といったものを岡谷自身がまとめて書き止めていたものです。

史料館の史料のタイトル自体が近現代の人からみると、古い感じを受けるのが、たとえば「常陸国土浦土屋家文書」という史料群名をつけるんです。なぜかといいますと、史料館の場合は、史料群をまとめて収集しているものですから、地方の文書の場合はほとんど近世から全部つながっているんです。だから、個人文書ではなくて、家の文書として集めているものですから、タイトルとしてはどうしてもこういう形になっているんです。ですから、それを見ていくと、これは近世の文書かということで、パスされてしまうんですが、一応近世から近代まで含まれているケースは非常に多いです。

土屋家というのは大名の家の文書ですが、史料館が持っているのは旧大名とか、旧公家等の史料といったものはかなりあるんですが、そこには明治期の華族になってからの史料も割と含まれています。この場合、土屋の教部省時代の日記だとか、彼の子どもが東宮職をやっていたので、その東宮職の関係の史料とか、そういったものが入っています。あとは、こういう華族関係の史料で一つのおもしろいものは家政史料です。家のなかでの、幾らお金がかかったかとか、使

用人が何人いて、どういうふうにやっていたか、どういう経済状態であったか、華族が明治以降にどういう経済状況にあったのか、どういう暮らしをしていたのか、そういったものを伺えるのが家政史料というのですが、そういったものが非常にたくさんあります。東京府の細川家の家政所文書は、明治から昭和にかけての熊本の細川家が家計をどうやりくりしていたのかというような史料です。執事とかがつけていたやつですね。京都の平松家は、平松時厚の関係史料がかなりメインになっているんですが、この史料の一つの中心になるのは華族会館ができる時の関係史料です。華族会館がどういう成り立ちでできて、どういう形でお金をもらって云々という関係の一連の史料として、かなりまとまっているものです。次の三條家というのは、三條実美の家の家政史料です。明治から昭和までの家政の史料です。次の徳大寺は、侍従長をやった徳大寺実則の日記の一部が入っています。徳大寺の息子の公弘と実厚という孫の日記も入っています。そのほかに家政史料とか、徳大寺が宮内相であった時に関わった宮内省の関係史料などなど、この徳大寺家文書は実はほとんどが近代の史料が中心になっています。ですから、見ようによっては、華族の生活とか、どういう暮らしをしていたのかとか、政治とは別の世界を覗くには非常におもしろい中身になっていると思います。そのほかに、役場文書というのは、戸長役場から始まって、村役場とか、いろんな役場文書を収集しております。そういった文書は、地域史研究では非常におもしろいものだと思いますし、そのほか、地方文書というほとんどは地主の文書ですから、彼らは近代のなかになってくると、大概県会議員をやっていたり、衆議院議員をやっていたり、なかには貴族院議員をやっていたりというケースが多いんです。そういったところの関係する文書なども割と入っています。ですから、一点一点見てみると、おもしろいものが含まれているのではないかと思いますし、多くの方に使ってもらえると、非常にあり難いと思います。

現在受け入れの作業中ですが、これは今年度中か来年には少なくとも仮目録を作って公開に入りたいと思っております鈴木荘六の史料です。これは陸軍参謀総長だった鈴木荘六の一連の史料であります。ただ、すごく重要なところとかいうか、彼の日記自体は11冊とかそのぐらい残っているんですが、その日記は参謀総長時代ではなくて、残念ながら、彼が広島師団長であった時にシベリア出兵していた時の日記がなかではおもしろい。あとはそれ以前の参謀本部の作戦課長だった時の視察日記だとか、そういったものになります。彼の日記のなかでは、シベリア出兵中の日記は非常に重要なものになっています。あと、彼が自叙伝を書いていまして、日記以外にその自筆の自叙伝が入っています。『鈴木荘六伝』という伝記と比べていくとずいぶん違います。実はどうもいまのところ考えているのは、彼が自筆で墨で書いた自叙伝というのがあって、そのあとにそれを活字化したものがあります。版組みまでしてやったやつです。恐らく鈴木死後、版組みで組んだやつをなんらかの形で出版しようと思ったんでしょうが、戦争末期になってきますとそれはできなくなる。その代わりとして、たぶん『鈴木荘六伝』の伝記ができたんだと思います。『鈴木荘六伝』のなかは、意識的に改纂されているケースと伏せ字になっているところかなりあります。そういったものは前の自叙伝のなかに幾つか書いてあります。陸軍内部のやりとりが多少入っていますし、そういう意味では非常におもしろいと思います。

伊藤 いま、ちょっと気になったのが、それまで上に挙がっているものと全然違うもので、これ

はどういう経緯でやることになったんですか。

加藤 これは僕がたまたま鈴木莊六の遺族の方とコンタクトが取れまして、そのなかで、史料があるということが出てきたものから、ではこっちのほうで受け入れようと。先生もご承知でしょうけれども、直系の家に残ってなくて、直系じゃないところに残っている。この場合は鈴木の子孫ですが、孫娘です。女性のほうに引き継がれていく。

伊藤 それはしばしばあるんですよね。

加藤 だから、そういうケースです。苗字が全然違うので、わからなかったんですけども、たまたまひょんなことからそういうのがわかりました。一応史料館の立場としては、実は紙文書だけではなくて、個人に関わるものはすべて史料群と捉えて受け入れるという立場をとっていますので、鈴木の場合は、勲章が付いている軍服だとか、なるべく原型を崩さないという形で一括して受け入れると。

伊藤 図書なんかも一緒に入れるわけですか。

加藤 ええ、ただ、図書は彼のは完全に失われていたので、物品類だけです。写真と勲章、そういったものを併せて、全部一括して受け入れるということをいましているところです。ちなみに、うちの史料館のほうでは、史料目録を毎年一冊か二冊出しています、いま、七十六集まで刊行されています。目録として刊行されていないものも、全部仮目録か、もしくはカード目録になっていますので、基本的には受け入れたものはすぐ全部公開しております。96年段階まで、何を持っているのかというのは、名著出版が出している『史料館収蔵史料総覧』のなかにすべて書かれています。ですから、そちらを参考にされると、一応ガイドブックとしてはできていますので、参考にしてください。

もう一つ、史料館のほうの事業というか、特徴としては、史料以外に目録の収集というのをずっと昔からやっています。これは10年前に三省堂から『近世・近代史料目録総覧』というのを出したんですが、史料館が持っている目録の総覧であります。いまも一応細々と続けていまして、全国各地で、自治体史の目録とか、ハンドライティングのものも全部含めて、気になるようなものはいただいて来るというのをやっています。割と目録コレクションとしては案外揃っていると思います。これも閲覧室でみるができますので、申請していただくと、いつでも可能です。だいぶ長くなりましたが、一応こういう形で終わります。

伊藤 どうもありがとうございました。お話のなかで、朝鮮総督府の東京事務所文書は外務省の外交史料館に入ったと。それとして、つかまっていないというふうなお話だったように伺いましたが、そうですか。

加藤 入ったというか、これ自体は、外交史料館にいた河村さんがファイルとしてまとめてられたのがどうも朝鮮総督府の東京事務所関係の史料らしいということだったんです。ですから、確実ではないんですが、どうも朝鮮総督府の東京事務所の場合は、外交史料館のほうに入って、ただ、それはまとめたものではなくて、幾つかにばらばらになっているということは聞きました。

伊藤 外交史料館の文書は基本的に外交史料館が編綴し直すというような形ですよ。私は前に石射猪太郎の遺族が「外交史料館に寄附しました」というので、外交史料館に行きましたら、「そ

んなのではありません」と言われました。ただ一人、思い出してくれた人がいまして、「あれはばらした」と。「ではその時にもらった目録はどこかに入っていないか」と言ったら、なんとかの第何巻に入っているはずだと探してもらって、ちゃんとありましたが、その人が覚えてなかったら、わからないですね。

加藤 たぶんそうだと思います。これはばらばらになってしまっているのです。

伊藤 河村さんですか。

加藤 河村ファイルという名称で言われていたらしいんですが、たぶんこれはばらばらになっちゃっているんでしょうね。

伊藤 その時も石射の文書だということを分類されてファイルされたところに書いてあるかという、書いていないんです。

加藤 では全然わからないんですね。

伊藤 はい。文書というのは出所をはっきりしなければ、文書を使う場合の価値は非常に落ちると思いますが、外交史料館はなぜそんなことをするのかと。いま、防衛庁の戦史部も同じことをやっているようです。

加藤 ああ、そうなんですか。それもばらしちゃうんですか。

伊藤 ばらすみたいです。

加藤 ちょっとそうされてしまうとね。

伊藤 最後にもう一つ、史料館が今度独立法人になるといった場合にどんな問題が生じますか。

加藤 基本的に史料自体に関してはいままでどおりですし、特別に問題はないんですが、ただ、公開するセクションがいま一緒になっている国文研と閲覧室を同じにするのかとか、そういう問題は出てきています。担当者自体が、国文の場合は図書館の司書ですので、図書館司書が果たして史料を扱えるのかという問題が出てきます。向こうはやる気満々なんですけど、たぶんやってみて、「やりません」と言うんじゃないかなと（笑）。

伊藤 その程度の問題ですか。

加藤 そうですね。それ以外は、全体的には組織の問題になりますから、組織自体は国文研と国際日本文化研究センター、地球環境研（滋賀県）、歴民博と大阪の民博の五機関が一つの法人になって、人間文化研究機構という組織になります。ただ、そのなかで、いまある機関をそれぞれ横滑りする形で機構ができましたけれども、そのあとに中期計画達成以降、6年後ぐらいには実際もう少しいじることができるんじゃないかと思います。問題になっているのは、確かに歴史部門が国文研に入っていて、もう一個歴民博が入って、業務がだぶっている。それとか、今度の機構自体が結局歴史という形で一つテーマを立てているんですけども、近現代をちゃんと扱えるというのはなくて、どちらかというと、前近代のもので、歴民博も実質的にはそういう傾向が強いものですから、近代以降のものをどうやってちゃんとやるか。また、人間文化研究機構が教育する場として総合研究大学院がありますが、そちらのほうの講座自体では、歴史部門ではほとんど前近代ぐらいで終わってしまっています。だから、教える教官自体も構成上偏っていますし、要は、大学共同利用機関には社会科学系の研究は一切なく、人文系だけですし、社会科学系の研究

機関がなくもいいのかという問題、それは外部からの問題ですが、幾つか問題があります。

伊藤 史料館は、元来は近世の文書の収集として始まったわけですね。

加藤 どうもイメージ的に後半そういうふうになってしまったんですが、1951年にできた段階で、一応設立目的は近世・近代です。最初の時も、文部省のなかの議論のなかでは、もっと踏み込んでいて、現代の公文書までという議論が出たんですが、実際はできた段階では、近世・近代です。だから、近世だけではなくて、それ以降も持っています。ですから、大久保先生なんかに関わっていました。

伊藤 そうですね。実際に、いま、史料館で近代史料に関わっているのはあなたぐらいですか。

加藤 そうですね。近代関係では私と、それから、館長の丑木先生が群馬県の地域史のほうです。もともとの出身、大学院自体が近代というのは私だけだと思います。

伊藤 そういう組織だと、うっかりすると、あなたが動いたりすると終わりになる危険性がありますね。

加藤 ハッハッハッ。

伊藤 わかりました。ありがとうございました。

茶園 ちょっと質問を兼ねてお伺い致します。先生がお話しになるということはだいぶ前からご案内をいただいております。テーマがわからないでずいぶんお尋ねをして、ごく最近わかりまして、満洲とか、朝鮮、台湾というところに残されている史料をめぐる問題というので、私自身も、ああ、そうかということで、七三一部隊のことを以前に少し調べていたんです。それですね。私は四国の徳島県の生れですが、七三一部隊の四支部の孫呉とか、牡丹江とか、ああいうところの守備兵には全部徳島、香川、高知、愛媛の四県が入っているんですね。そういう関係から、聞き書きをずいぶんしまして、史料その他のことにも調査をしてみたことがあるんです。それで、そのことをちょっとお聞きしようかなと思ったんですが、さらに先生のデータをみてみますと、満洲の史料の現在日本にあるものも所蔵されていることがありますね。私も実は400ページぐらいの復刻のもので一冊本を出しているんです。それをよく見て来なかったので、自分で書きながら、十何年前のことですから、忘れているんです。思い出しますと、満洲移民の基本的な立案のもので、当時の満洲の事情の調査とか、あるいは日本人をどうやって移民させるかという拓務省の内部文書なんです。内務省の局長クラスの人が持って出ていまして、遺族が持っているものを私が入手しました。だから、終戦の時も焼かれなくて済んでいるので、非常に珍しいと言われまして、解説も私がしまして不二出版さんから出ているんですが、もしお目に止まったら、ご批判いただきたいと思うところがあるんですが、いまここで持ち合わせがないので、そういう自分の宣伝も兼ねて、参考のためと思って申し上げました。

加藤 ありがとうございます。

伊藤 5時半になりましたが、どなたかご質問がありましたら、はい、どうぞ。

鹿島 目録のとり方について質問があるのですが、徳大寺家文書などは家ごとにカタログを作っていたために、近現代の人たち、特に近代の人はこの名前からこの中身にアクセスすることが難しかったわけですね。たぶんこれからそちらで集められる史料と云ったら、どちらかといえば、

近世以降のものが中心になるかと思いますが、その時に、カタログニングのやり方を変える計画はないのでしょうか。それとも、このまま家分けでものは分け続けるのでしょうか。

加藤 いえいえ、たとえば史料のなかでも、岡谷文書なんていうのは個人文書なので、その場合は個人名で出しています。その史料の性格に合った名称にしていますので、たとえば鈴木荘六でも、鈴木家文書なんていう名前にはしません。鈴木荘六の史料ですから、やはり鈴木荘六の史料であって、このなかには彼の息子さんの史料も多少入っているんですが、そうなってくると、関係史料ということで処理します。

梶田 私は三條家文書とか、徳大寺文書を実際みた時に、三條なんかは近代以前の文書も含んでいますから、これはしようがないかなと思ったんですが、徳大寺に関しては、明治初年以降の史料しかないわけですね。それはやはり東京府徳大寺文書にすべきじゃないかなと思ったんです（笑）。若干問題があるような気がしますが。

加藤 そうですね。付けた人が。

伊藤 まあ、歴史的に付いていますから。

加藤 ただ、これは確か清華家の文書も多少入っています。

伊藤 戦乱期ですか？

加藤 清華家です。そちらの史料も前近代として入っていましたので。

梶田 入っていましたっけ。

加藤 混ざっているんです。一応これはそういう形で京都の徳大寺という形になっています。ただ、わかりにくいですよ。

黒澤 以前、朝日新聞で、先生は史料センターの構想を話されたことを見たんですが、その後、話のほうは発展しているのでしょうか。

加藤 いや、史料センターをつくろうと言っているぐらいですから、まだなんとも言えません。ただ単に、今度の独立法人化のなかで、人間文化研究機構となりますけれども、恐らくさきほど話したように、とりあえずは現状維持というか、横滑りになりましたから、6年後ぐらいにはまた組織改編の問題が出てくるんじゃないかと思います。いまから言うておかないということです。

伊藤 せっかくこの機会に、いかがですか。なければ、終わりにさせていただきます。きょうは、加藤先生から非常に有意義なお話を聞くことができまして、本当にありがとうございました。また、これからもよろしく願いいたします。

(終了)